

横浜市立大学学術情報センター

# 貴重書 月替わり展覧会リーフレット (167)

2025年8月の作品は

いつくしまき  
「**嚴島記**(『秋長夜話』)」

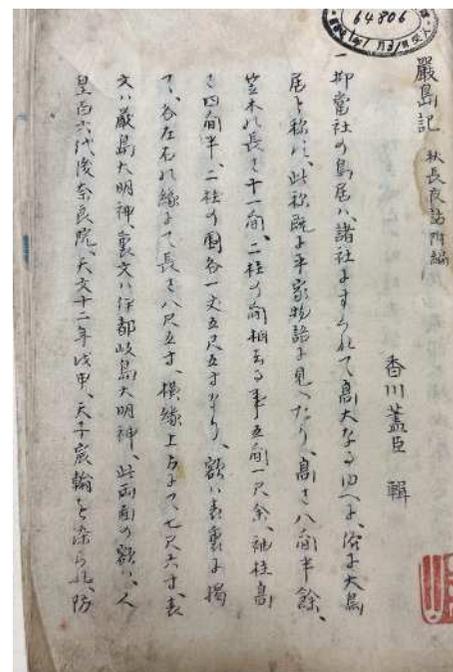
展示テーマ

～ 嚴島神社の大鳥居の歴史を遺した「嚴島記」 ～

広島には嚴島神社がある。社殿が海上に建てられるという特徴的な構造をしている嚴島神社は、満潮時には社殿や大鳥居が海上に浮いているような幻想的な姿を見せてくれる。嚴島神社は推古朝の593年に佐伯鞍職によって創建されたと伝えられ、社殿が建てられた宮島全体が神聖な神の島として扱われてきた。嚴島神社といえば平家の守護神として篤く信仰されてきた歴史を持つ。宮島の繁栄は、京の文化を持ち込むなど安芸守であった平清盛によって支えられていた。また、彼によって現在の美しい嚴島神社が造営されたことから嚴島神社は平家の氏神として信仰されてきた。

嚴島神社の大きな特徴として海上に浮かぶ巨大な大鳥居の印象が強い人が多いだろう。この大鳥居は天災や自然倒壊などで過去何度も再建されており、現在の大鳥居は9代目と言われている。今回取り上げる作品は、この大鳥居の再建の歴史が細かく描かれている。特に元文4年(1739)の再建について詳細に描かれおり、再建成就を願って詠まれた和歌も遺されている。

そこで今回は、その和歌に込められた想いについて紐解いていく。



いつくしまき  
「**嚴島記**」(1冊)

江戸時代末期

作者：香川南浜 (1734～1792)  
かがわなんびん

縦 22.5cm × 横 17cm

この作品は江戸時代末期に当時の広島藩の藩儒者として活躍した香川南浜によって描かれた随筆『秋長夜話』に附編として収録されたものである。『秋長夜話』本編では3～20行程度で説話のような小説が箇条書きの形で書かれている。書かれている内容はどれも広島にまつわる話ばかりである。今回取り上げる「嚴島記」

には、嚴島神社の象徴である大鳥居の概要やその歴史について詳細に書かれている。この「嚴島記」を書くにあたって香川南浜は、大鳥居が建造された当時の資料などから文章をそのまま引用している箇所があるため、本文は仮名文字の文章と漢文が入り混じっている。以下では「嚴島記」に記された大鳥居の概要や歴史について簡単に紹介していく。

大鳥居が最初に建造された際に設置された扁額へんがくは天文12年(1543)に後奈良天皇によって書かれ、防州山口城主の大内義隆へ下賜された後に、嚴島神社へと寄付されている。この扁額の表記は表裏で異なっており、表側は「嚴島大明神」裏側は「伊都岐島大明神」と書かれている。後奈良天皇によって書かれた扁額は元文4年(1739)の再建時に新しい物へと取り換えられている。ちなみに嚴島神社が最初に建造された推古朝の593年における扁額の表面は小野道風、裏面は空海によって書かれた。

大鳥居の再建について「嚴島記」では、永禄4年(1561)の毛利元就による再建と元文4年(1739)の浅野吉長による再建について触れられている。毛利元就によって再建された大鳥居は享保元年(1716)に自然倒壊、浅野吉長によって再建された大鳥

居は安永5年(1776)に落雷によって焼失している。(表1参照)

浅野吉長による再建を支えた当時の藩儒・田臨川(寺田臨川)は、再建に関する記録をまとめた『重造厳島神廟華表記』の中で、大鳥居が失われた享保元年(1716)と安永5年(1776)の干支はどちらも丙申であることを不思議であると述べている。「厳島記」は、田臨川による『重造厳島神廟華表記』の全文を掲載

1561年 (永禄4年)	毛利元就によって大鳥居が再建される
1716年 (享保元年)	大鳥居、自然倒壊
1739年 (元文4年)	浅野吉長によって大鳥居が再建される
1776年 (安永5年)	大鳥居、落雷により焼失

表1

し、丙申について香川自身の考察を述べる形で完結している。その内容は、「かつての厳島は安芸国の一宮として鎮座祭が天皇の勅使によって行われる勅祭であるなど、神社の造営に努めていた。しかし、朝廷の衰退とともに大内氏や毛利氏といった厳島を属地にしようとする者達の出現で神社の造営が怠られた。このようなことは千歳の規模の恥辱であり、今の人の恥辱だけでなく、その子孫の不忠でもある」というものであった。香川は「厳島記」を通して神の島として奉られたかつての厳島の姿を、もう一度安芸の人々に訴えようとしたのではないだろうか。

### 展示のみどころ

#### ～ 大鳥居再建の成就を願う和歌に込められた想い ～

「厳島記」には、元文4年(1739)の浅野吉長による大鳥居再建の時期に詠まれたと考えられる長歌という種類の和歌が掲載されている。この和歌は大鳥居再建の成就を願って詠まれた和歌である。厳島に棲む神を敬い、大鳥居の再建の意義や、大鳥居の存在が人々に何をもたらすのかを象徴的な表現を用いながら詠まれている。今回は特に印象的な部分を分析し、和歌に込められた想いを考えていきたい。

図1は長歌の中盤部分であり、5行目以降の翻刻は以下のとおりである。

陰陽両義の ふたはしら ふとしまたてて ひさかたの 天のむなきや かさきさへ  
 たれおほいつつ あらかねの つちのうつはり  
 よこたへて つらぬきとほり のせたもつ 人のこころの はしらまで そなはりにたる

「ひさかたの(久方の)」と「あらかねの(粗金の)」は、それぞれ空と土に関係する言葉にかかる枕詞である。これらの枕詞は「むなき(棟木)」「かさき(笠木)」「うつはり(うつ梁)」といった鳥居を構成する建築用語にかかっており、それぞれに空や土というイメージが結び付けられている。

これらのことから、「陰陽両義の意味を持つ二柱を大きく建て、笠木や棟木を空さへ覆うように乗せ、地上にうつ梁(=大貫)を二柱を貫くように乗せる。そうすれば、人の心の柱まで満ちて備わる。」という解釈ができる。つまり、鳥居の存在が人々の心まで潤すと詠まれているのである。また、「厳島が国司による世として栄え続けていけば、永く続く宮として神が見守るだろう」という意味合いでこの長歌は締められている。

以上のことからこの長歌に込められた想いとは、「鳥居の存在が人々の心を潤し、国司による世が永く栄え続け、神が厳島を見守るだろう」というものであると考える。

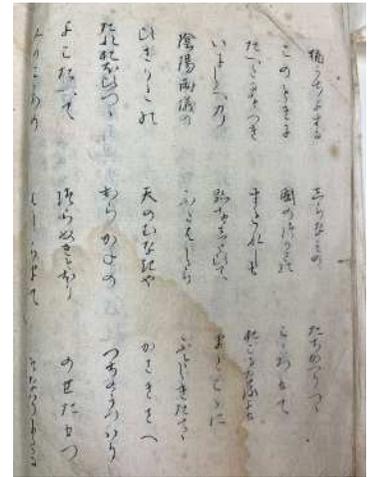


図1

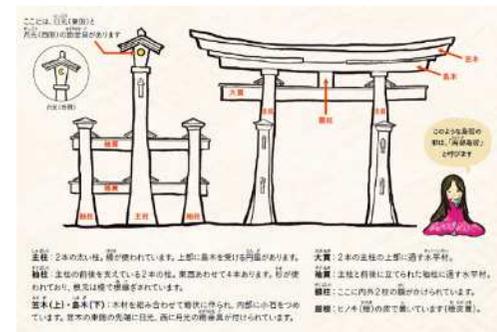


図2 出典：県立広島大学宮島学センター、「大鳥居のひみつ」(2020)。  
[https://www.pu-biroshima.ac.jp/uploaded/life/46987\\_116910\\_misc.pdf](https://www.pu-biroshima.ac.jp/uploaded/life/46987_116910_misc.pdf) (参照 2024-11-11)

#### 参考文献

・一般社団法人宮島観光協会。「観光スポット 厳島神社」. 一般社団法人宮島観光協会。  
[https://www.miyajima.or.jp/sightseeing/ss\\_itsukushima.html](https://www.miyajima.or.jp/sightseeing/ss_itsukushima.html), (参照 2024-10-28).

#### あとがき ～貴重資料に触れて～

今回の資料には参考となるような論文がなく、苦勞したことも多かったが、資料を実際に手に取って調査することは自分の中ですごく貴重な経験となった。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。



※過去の展示はオンラインでも公開中です！  
※第168回展示は令和7年9月上旬からを予定しています。

令和7年8月1日発行  
令和6年度 日本文化論B受講生 編集  
236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2  
横浜国立大学 学術情報センター